

A分科会 テーマ「スポーツ少年団と総合型地域スポーツクラブ

単位スポーツ少年団の限界とその克服への道」

座長 大橋美勝氏

パネリスト 宮嶋泰子氏、大西真知子氏、田中忠夫氏、赤川行男氏

A分科会は、大橋氏を座長とし、各パネリストに事例を交えながら発表いただいた。

宮嶋氏からは、「スポーツジャスト」の編集委員として全国の状況を見ている立場から、チーム化した単位団とその限界について、また、総合型になっていくことの必要性についてご意見をいただいた。

いけだスポーツクラブのマネジャーである大西氏からは、総合型地域スポーツクラブ立ち上げ時および現在の様子、また、今抱えている問題について発表いただいた。

秋田県の総合型地域スポーツクラブ育成アドバイザーである田中氏からは、活動が盛んである同県琴丘地区での取り組み、および三種町スポーツ少年団の様子について発表いただいた。

京都府スポーツ少年団副本部長である赤川氏からは、同府内山田市スポーツ少年団本部の事例をもとに、これまでの市町村スポーツ少年団について、また、これからのスポーツ少年団本部の在り方についてご意見をいただいた。

最後に各パネリストの発表を受けて、大橋座長よりまとめがあった。

様々な活動形態の少年団があるが、特にチーム化した少年団の場合、そこで果たしている機能は、スポーツが楽しめる、自己実現ができる、健康や体力のために役立つ、ストレスが解消できる、そして友達が増えるなどといった個人的機能である。

当然そのような機能も必要であるが、これからの50年を考えると、社会の変化に合わせて変容してきている、求められる機能も果たす必要があるだろう。少年団が抱える問題としては、少子化によってチームが組めないことや後継指導者不足などがある。また、幼児からの運動が大切だといった時に誰が面倒を見るのか、高齢者・障がい者はどうするのかなど、スポーツをやりたいと思ってもやれない人々をどうするのかといった地域のスポーツが抱えている問題、あるいは、少子化および高齢化により町が廃れてしまい、若者が全く帰ってこないなどといった地域そのものの問題がある。そういったものを解決していく機能を果たすようになっていけば、少年団そのものが認知されるだろうし、社会的評価も高まり大いにサポートされるであろう。また、そういった社会的機能を果たしていくにはどうしても単位団では無理なため、総合型地域スポーツクラブにしていく必要がある。

しかし、総合型地域スポーツクラブに移行しようと思ってもできないところがまだある。今までスポーツ少年団本部は何をやってきたか。行政に頼りきりで、これからの50年はいいか。少年団そのものが傘下の少年団をかい込んでいるわけだから、それを全部機動

させて、社会的機能を果たしていくことができるのではないか。そのために、総合型地域スポーツクラブに関しては宮嶋氏と大西氏から、それからスポーツ少年団本部の在り方・機能の問題については田中氏と赤川氏からそれぞれ話を頂戴した。

ただし、現実には総合型地域スポーツクラブ移行後の問題は大変多岐に渡っているため、また次の機会に取り上げていくこととした。